

テーマ「藝術と記憶」

作法としての空間意匠 ～月待ちの日本美～

京都嵯峨芸術大学 教授 大森正夫

室町文化、とりわけ東山文化は日本の諸藝術に多大な影響を与え、今日の日本人の美意識や趣味の形成において極めて大きな存在である。東山時代とは、室町幕府第8代将軍足利義政が東山山荘へと移住してから没するまでの短い期間(1483～1490)であるが、それは義政の趣味に基づいた芸術文化が大きく発展し、後世の日本人の心の奥底に「記憶」させる日本の美意識を確立させた時代に他ならない。

特に、現在でも継承されている連歌俳諧、茶の湯、いけばな、聞香、能楽、床の間、畳、築庭、精進料理など、諸処の文化活動に新鮮な局面を開いたこれらのものはすべて東山文化を代表するものである。そして、「わび」「さび」「幽玄」などを特徴とする表現には、客観的写実性より主観的象徴性が相応しいとされ、ここで築かれた藝術観は、近代化やグローバリゼーションの中でも色褪せる事なく日本人の心の「記憶」として生き続けているのである。しかし、その神秘的な言説に拠る故か、文献的資料や遺構建造物の不足に拠る故かは定かでないが、室町文化の粋を成した東山文化の発信源である東山殿（遺構としての「銀閣とその園池」）の意匠学的観点からの研究は乏しく、国宝・銀閣の建立意図させも解明されていなかった。

そこで、造形上の特徴を顧みる前に、日本文化が生み出す諸藝術の根幹を成している「作法」や「躰」などからくる美意識、すなわち伝承的に習慣化した身体感覚での「記憶」（使われ方や見方など）を拠り所に諸処の意匠や空間配置を捉え直すことによって、東山殿の藝術性が垣間見えてきたのである。

日本人は万葉集を繙くまでもなく、月への思いが尽きない。

「わが庵は 月待山の麓にて 傾く空の 影をしぞ思う」

足利義政が詠んだ一首である。この歌を詠んだ当時の面影は、銀閣と東求堂とわずかに残る苑池しか残っていないが、この質素な造りの建造物から、文化行事としては非常に重要な「観月の宴」の「記憶」が蘇ってくるのである。

この所作と空間構成との関係はCGシミュレーションに拠ってはじめて解明されたのであるが、特筆すべきは、月姿を直接に眺めるのではなく、水面などで「うつろう」幽玄なる美として捉えようとする意匠の存在である。なぜならば、このことは平安中期に確立した国風文化による日本の世界観への「記憶」を義政が頼りにしていた事をも意味しているからである。

この度の発表では、「月待ち」の「記憶」に潜む日本人の身体感覚的美意識から、CGシミュレーションを用いながら東山文化での建築と庭園の「かたち」に記憶された日本人の身体化した作法としての「記憶」について説明した。特に、十三夜に行われる観月の宴から推察される「未生」と「虚ろ」の美による「風景」の意味する世界をプレゼンテーションした。

それは、「西芳寺（苔寺）」での「記憶」を頼りに「北山殿（金閣）」が建立され、金閣から派生する「記憶」の延長線上に「東山殿（銀閣）」は存在し、それゆえにそれらから多くを倣い、八条宮は「数寄」なる「桂離宮」へと想いを馳せた、と考えていった時に見えて来る風景である。私たち日本人が築こうとしている空間には、形なき美意識の「記憶」が頼りになっており、その基底の一つに身体的伝授としての「東山文化」が存在するような想いをもっている。

※ 参考文献：大森正夫著「京都の空間遺産～社寺に隠された野望のかたち、夢のあと～」(淡交社)

※ 使用CG：自主制作CG、NHK「ワンダー×ワンダー：銀閣 幻の“月の御殿”」(監修：大森正夫)

